

近

縁

如來智慧光明は普ねく照して徧せざる所なきが故に実には遠近なし。然るに衆生自ら無明の覆ふ所、本來大智慧光明中に在りながら、信眼なく自ら遠く見ること能わず。譬えば盲人日光の中に在りて之を見ることが能わざる如し。若し念仏して信心眼開く時は忽ちに仏光現前すべし。衆生八識心我の為に分別計度して小分個体を我とし。若し如來心と相應する時は
大智慧遍照せざる無き故に近縁とす。

如来の^{にやらい}大心^{だいしん}光^{こう}は遍^{あまね}く法界^{ほっかい}を照^{てら}し一切^{さい}の時^{とき}一切^{さい}の処^{ところ}に周遍^{しゅうへん}せざることなければ衆生^{しゅじょう}の信念^{しんねん}と交渉^{こうしやう}し接近^{せつきん}不可離^{ふかり}の關係^{かんけい}をなす。故^{ゆえ}に近縁^{こんねん}なり。

衆生^{しゅじょう}信念^{しんねん}已^{すで}に熟^{じゆく}し心靈^{しんれい}開發^{かいふつ}するときは斯^この大心^{だいしん}光^{こう}裡^りに摂^{おさ}められ正知見^{しやうちけん}を与^{あた}えられ如来^{にょらい}と共に行住坐臥^{ぎやうじゆうざが}一切^{さい}の処^{ところ}に於^{おい}てつねに離^{はな}るることなき因縁^{いんねん}を以^{もつ}て如来終局目的^{にょらいしゆうきよくもくてき}なる聖^{きよ}き道^{みち}に向上^{こうじやう}すべき縁^{えん}なり。

如来の心光^{しんこう}近縁^{こんねん}は人^{ひと}の心理^{しんり}の形式^{けいしき}の上^{うへ}に於^{おい}て近^{ちか}く觀^{かん}すべき、致^ち一^{いつ}すべき、近^{ちか}く感^{かんの}應^{のう}し、近^{ちか}く見聞^{けんもん}するに時間^{じかん}を隔^{へだ}てず空間^{くうかん}に妨^{さまた}げられず一切^{さい}の処^{ところ}一切^{さい}の時^{とき}に於^{おい}て感^{かんの}應^{のう}し見聞^{けんもん}し得^うる因縁^{いんねん}なり。

先^まづ近縁^{こんねん}の真理^{しんり}を明^{あきら}かに識^しらんと欲^{ほつ}せば先^まづ須^{すべ}らく如来心光^{にやらいしんこう}の本質^{ほんしつ}性能^{しせい}を識^しらざるべからず。

如来光^{にやらいこう}明^{みやう}の本質^{ほんしつ}とは太陽^{たいやう}等^{とう}の光^{ひかり}の如^{ごと}く物質^{ぶつしつ}的^{てき}の力用^{りきよう}と思^{おも}うべからず。如来心光^{にやらいしんこう}は宇宙^{うちゆう}に周遍^{しゅうへん}せる即^{すなわ}ち一切^{さい}知^ち一切^{さい}能^{のう}の心靈^{しんれい}態^{たい}なりとす。一大心靈^{だいいしんれい}的光^{こう}明^{みやう}の本質^{ほんしつ}は時間^{じかん}

空間及び一切物質を超えて絶対的になると共に一切万物中に存在せる心靈態光明なれば觀念態に万物中に存在し絶対同時態なり。

心光の形式と内容

如来大心光 即ち一切智と一切能の性能に其の形式と内容は大智慧光明と大悲悲光明之なり。大智慧は心光の形式にして大悲悲は即ち内容なり。甲は心光の相象にして乙は活動なり。心光に両性能を具することは物的の光明 即ち太陽の能力の光線熱線化学線に於けるが如く此の光と熱とは二者本離るべきものに非ず。然れども其の能力に至つては同一にあらず。心光の智慧光は太陽の光線に比すべく之れ近縁なり。慈悲の温暖なるは太陽の熱線に比すべく之れ親縁なり。増上縁とは化合線に例すべく如来の智慧をして能く衆生のために悪質を解脱し聖靈態に靈化し玉う靈力に在す。

近縁は大智慧光にして十方三世に遍照せる心靈的形式にして衆生の心靈開く時は能所不二、機能一体となる。大智慧光明の作用上に於て之を四種に分類することを得。恰も人の精神は本一体なれども其の作用の上に於て知情意の三類に分類すると同じく法界周遍の心光にも四種に分類す。即ち大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、之なり。斯の四智は衆生の写象と理性智力感覺の四心作用との關係に於て或は一致し契合しまたは感應し見聞せしむる等に於て接近不可離の因縁となす。

如來四智円明の心光 明は本來法界に遍照し昭々靈々として常然に照耀せるも衆生は無明に翳せられ慧眼已に盲いて大心光の日の下に在りながら自ら知見する能わざるなり。

若し念仏三昧の秘鑰をもて自己の心靈の窓を開く時は四智心光は永えに照しわたりて吾人の心念と接近不可離の近縁なることは自ら悟入せらるべし。

大円鏡智

衆生の觀念と直觀的の不可離

平等性智
びようどうしやうち

最高理性と機能致一的に
さいとうりせい きのうち いってき

妙觀察智
みやうかんざうち

生仏感應神秘的に
しやうぶつかんのうしんびてき

成所作智
じやうしよさち

高等なる靈的感覚に感應す。
かうとう れいてきかんかく かのう

鏡智と衆生直觀との致一的近縁

如來の太円鏡智と衆生の觀念とは本來其本質同一なるが故に致一的接近不可離なり。
にやらい だいえんきやうち しゆじやう かんねん ほんらいそのほんしつどう ち てきせつきんふ かり

この理を明さんに先づ太円鏡智の本質性相を詳かにせざるべからず。太円鏡智は
り あか ま だいえんきやうち ほんしつしやうそう つまびら だいえんきやうち

絶對的觀念なり。即ち宇宙心王如來の一切智慧の一面なりとす。物と心とは本同一觀
ぜつたいてきかんねん すなわ うちゆうしんおうにやらい さいちえ めん もの こころ もとどう かん

念の二現なり。それは寫象を可能にするが故に、又物体を通じて無碍の故に知るべし。
ねん げん しゃしやう かのう ゆえ またぶつたい つう むげ ゆえ し

宇宙は吾人が認識によれば客觀の物質と主觀の心質と全く相反せる二質存在する
うちゆう ごじん にんしき きやつかん ぶつしつ しゆかん しんしつ まった あいはん しつそんざい

が如くに認むれども能く理を押し観ずれば此の二質は本來同一本質の兩現象なり
ごと みと よ り お かん こ しつ ほんらいどう ほんしつ りやうげんしやう

と云うを得べし。何となれば客観の物質と主観の心質とは本同本質の故に、吾人は外界の物質を写象するを得べく。若し幼稚なる思想の観ずる如く本質にして全然異らば吾人は写象する能わざるべし。然るに現に此の写象を可能にするを見れば本質に於て同一なることを承認せざるべからず。

此の物心二面は同一根底にしてその統一的総体を絶対觀念即ち如來の大円鏡智とす。

而して自然界の一切の物質的万象は一大意力に実現せられたる客観々念なりとす。物質に湿煖堅動等の箇体なるは意思即ち力の作用なり。万物は内面より自発的に力によりて実現せらる。それを外面より見る時は時間空間の形式に随い因果律的に生産す。現象の森然たるものは一大觀念即ち大円鏡智の客観態にして一切万象は鏡智所現の影像なり。大円鏡智即ち絶対觀念の外面なり。客観と主観とは同一觀念の内外面に於てこの統一は大円鏡智なり。

次に絶対觀念即ち大円鏡智は万物の中に存して無碍なることを明さん。嚮きに鏡智は宇宙全一觀念態にして物心両現象はその二面なるを明しぬ。

此の物心二質の本質は本觀念態なるが故に無碍なりとは吾人が觀念は客觀の万物あるにかかわらず其の中を通して碍るなし。視よ吾人が眞想直觀に入つて宇宙を大觀する時は天地を貫通して一体無碍となる。宇宙は蕩然として、一切万物は片影だになく唯大円鏡のたるのみ。斯る直觀の前には地球もなく天体もなく鉄壁も障礙すること能わず。吾人が全一の直觀の前には時間空間及び一切物質を超越して、然たる大円心のみ。かゝる境界を尽十方無碍光と名づくこれ如来大心光明なり。

宇宙全一觀念の中に於て客觀物質も吾人の精神も本同一の本質より現じたるものとすれば、吾人の個人的觀念と宇宙一大觀念とは本同一本体なるを自ら認得する時は吾人の觀念は大円鏡智の一分たること自ら明なり。即ち大円鏡智と衆生の直觀とは接近不可離の因縁なること明ならん。

たとえば大円鏡智は大虚空の如し、空に本内外なし、然れども若し家屋を作る時は自ら内外をなす如く、一大観念中の個人の観念なれば、吾人観念の靈窓を開かば、若し家屋の窓を開く時空に内外なきが如く、如来大円智光の中に十方洞然として無碍なり。

感覚と観念

一大観念の現象たる自然現象は吾人の感覚即ち肉眼の対象にして如来の大円鏡智の本質内面は観念の対象なりとす。吾人の肉眼は因果律に規定せられ無碍なる能わず。此の肉眼は器械的にして時間空間の形式に規定せらる。眼を放つて漠々たる広原洋々たる蒼海を望む時は遙の彼方水光天に接し天地相接し天涯に限ありてさまでに広大ならざる如き是れ吾人の肉眼に映じ来る天涯なり。抑この宇宙何ぞそれ吾人が感覚するほどの狭少なるものならんや。独逸のフエヒネルは宇宙に対する吾人の視覚は環の

内面を見而して直観は外面を観るが如しと云えり。実に吾人が直観的に宇宙を観じ来る時は宇宙の無限なる天涯の無辺なる肉眼の感覚したる分齊の比にあらず。

自然界と心靈界

自然界と云いまた心靈界と云い宇宙に本来二面あるにあらず。宇宙は本然として法爾なり。たゞ宇宙に対する衆生が二面に観ず。人が天則秩序に随つて生得上感覚するものは自然界なり。天に日月星辰ありて懸り地に動植物あつて生活す。此の自然界を以て宇宙は之に尽したるものと思惟せり。

唯識等によれば吾人が生得の感覚する所の自然界は主観と客観、精神と物質とは内界と外界にして別々なる如くに見ゆれども其の実は自己の主観が客観的觀念として客体化して見ゆるまでのことにして本一体なり。自然現象は自己の識色を向うに見

て客観きやくかんとするに過ぎざるもので、主観しゆかんも客観きやくかんも内外ないがいを併あわせて皆みなアラヤ識しきの両面りやうめんなりとす。

このアラヤ識しきを転てんずる時は大円鏡智だいえんきやうちとなりて主観客観しゆかんきやくかんの相對そうたいを超こえて絶対的觀念ぜつたいてきかんねんとして宇宙うちゆうは絶対同時態精神ぜつたいどうじたいせいしんなりとす。是これを諸仏しよぶつの得えたる所ところの大円鏡智だいえんきやうちと為なすと。

唯識論ゆいしきろんは究竟くきやうの真理しんりを明あかす教おしえに非あらず。アラヤ識しきとて個人個人こじんこじんの識しきが別々べつべつにありて自分ぶんの識しきに應おうじて客観きやくかんを感じかんずとし、此この個人根底こじんこんていたるアラヤ識しきが唯識觀ゆいしきかんによりて真理しんりが顕あらわる時はアラヤは転てんじて大円鏡智だいえんきやうちとなる。斯かくなりて後のちには從來じゆらい寫象しやしやうし來きたれる世界かいは亡もうじて仏境界ぶつきやうかいと現げんじ來きたると。そこがまだ唯識ゆいしきが未いまだ畢竟ひつきやうの真理しんりを明あかしたる說せつに非あらざる所以ゆえんなり。

若もし極大乘ごくだいじやうによれば大円鏡智だいえんきやうちは人ひとのアラヤ識しきを轉てんじて初はじめて成なるものに非あらず、本来ほんらい法ほう仏ぶつ如來にょらいの大円鏡智だいえんきやうちは本然ほんねんにして宇宙うちゆうの總相そうそうにして即すなわち絶対觀念態ぜつたいかんねんたいなり。絶対觀念ぜつたいかんねん即すなわち宇宙心うちゆうしんの總相そうそうなり。本来宇宙心ほんらいうちゆうしんの絶対觀念態ぜつたいかんねんたいの大円鏡智だいえんきやうちは本然ほんねんにして吾人ごじんが主観しゆかん

と客観、即ち精神と自然現象界と見るものは絶対観念の相対的現象にして吾人の精神は其の一部分たるに過ぎず。之を唯識にてアラヤ識と仮りに名づけたるものとす。主観客観の相対を超越して絶対観念にして一切の個々なる分を離れて総体なるは大円鏡智なりとす。

相対に見ゆべき自然現象界を超えて観念界の円融無碍自在の方面を心靈界とす。大円鏡智は絶対観念なれば自然現象の客観と雖それと離れたるものにあらず。されど衆生が肉眼即ち感覺の方面より観るを自然界と名け観念的に直観するを心靈界と為す。

摂取の光明は心靈界に帰せしむ

如来の光明に天則秩序をなすと終局目的に帰趣せしめるとの二面あり。自然界に

主觀客觀の二象歴然たるは天則的に現じたる觀念にして是れ一切主觀客觀の一大元素にして一切万物を現象す。若し此の觀念的智象なからんか天に太陽なきと同じく主觀も客觀もなく一切の現象もなきに至らん。大円鏡智の相對的現象として此の自然界の物心二象と現じたり。而して衆生の心靈を向上せしめん目的は終局に真理の靈界たる絶対觀念なる大円鏡智に契合せしめ相對規定より離脱し分を離れ全に帰せしめん爲めなり。故に吾人はアラヤ識的小我をすてて如來に觀念的に歸する時は一大心光の鏡智に攝取せらる。

大円鏡智に摂せられたる心理狀態は楞嚴に阿難が如來によつて自己の伏藏を開示せられ十方の虚空は悉く自己の觀念裏なることを悟入せし如し。

能觀の心と所觀の心光と機能致一の故に近縁

大円鏡智は絶対観念にして、吾人の感覚が自然現象と見るは一大観念の相對の客觀一面を識るものにて感覚の肉眼を以て知るものは心靈界に非ず。

攝取の心光に攝取せられ心靈既に開發して観ずるときは自己の観念と一大観念なる大円鏡智とは本同一本質なれば、本一大観念中の個々の現れにて此の一大観念を離れて吾人の観念あることなし。如来心靈界は感覺すべきものに非ずして直観すべきものなり。

一大観念中の吾人の観念なれば能觀の心と所觀の境とは本来一体なり。吾人の観念は所觀の境に随つて能觀の心をおこす。能所致一なる時は函蓋契合すると同じ。

所觀の光は普く十方を照して辺際なきを觀ずる如く如来大円鏡智遍法界の故に能觀の心もまた遍法界。乃至十力十八不共法等の法界に遍して無辺の故に能觀の心もまた無辺なり。能觀の心は所觀の境と接近し一致して不離。

吾人が如来の大円鏡を觀ずるに當つて如来の一大観念を離れて吾人の観念なし。ま

吾人^{ごじん}が能觀^{のうかん}の心^{こころ}を離^{はな}れて所觀^{しよかん}の境^{きやう}なし。故^{ゆえ}に宗教^{しゆうきやう}的觀念^{てきかん}即^{すなわ}ち如來^{にょらい}の鏡智^{きやうち}と吾人^{ごじん}の觀念^{かんねん}とは一体^{たい}の兩面^{りやうめん}と云^いうを得^うべし。いかにとなれば一大觀念^{だいかんねん}の大円鏡智^{だいえんきやうち}を主觀^{しゆかん}の方^{ほう}より見^みれば自己^{じこ}にして客体^{きやくたい}の方^{ほう}より見^みれば如來^{にょらい}なり。故^{ゆえ}に能所^{のうじよ}一致^{いつち}の最も近^{ちか}き縁^{えん}なりとす。

觀念は絶対無碍

吾人^{ごじん}は此^この宇宙^{うちゆう}に對^{たい}して外觀^{がいかん}すれば主觀^{しゆかん}の自心^{じしん}と客觀^{きやくかん}の世界^{せかい}とは相對^{そうたい}的^{てき}にして一方^{ほう}は主觀^{しゆかん}精神^{せいしん}態^{たい}一面^{めん}は客觀^{きやくかん}物質^{ぶつしつ}と觀^{かん}ずるは是^これ皮相^{ひそう}の觀^{かん}なりと云^いうを得^うべし。

若^もし直觀^{ちよくん}的に宇宙^{うちゆう}を大觀^{たいかん}するときは能觀^{のうかん}の心^{しん}と所觀^{しよかん}の境^{きやう}とは全然^{ぜんぜん}冥合^{めいごう}し渾然^{こんぜん}として一致^{いち}し、内^{うち}に非^あらず外^あに非^あらず、絶對^{ぜつたい}無寄觀^{むきかん}に入^{はい}る。ここに至^{いた}つて觀^{かん}ずれば過去^{かこ}未來^{みらい}現在^{げんざい}を當念^{とうねん}に収^{おさ}め、東西南北^{とうざいなんぼく}四維^{しゐ}上下^{じやうげ}の別^{べつ}なく、洞然^{とうねん}として一体觀^{たいかん}なり。一切^{さいばん}万物^{ぶつ}に於^{おい}

て毫ごうも障碍しょうがいするものなく、十方じつぱうを尽つくして唯一ゆい観念かんねんの光こう明みょうのみ即すなわち大円鏡智だいえんきやうちのみありて昭しょう々しょうたり。斯この絶対無碍ぜつたいむがいの境界きやうがいを主体しゆたいと云いわんか。絶対ぜつたいにして客きやくなきに焉いづくぞ主しゆと云いわん。客きやく体たいと云いわんか、絶対ぜつたいにして主しゆなきに何識なんぞ客きやくと云いつて主客しゆきやくを分わかたんだ。この絶対無碍ぜつたいむがいの一大観念界だいかんねんかいに契合けいごうして初めて弥陀みだの大円鏡智だいえんきやうちと衆生しゆじやうの信念しんねんとの形式けいしき一致いちしたるものとす。

本来ほんらい絶対観念ぜつたいかんねんの外ほかに個々ここなきものなれども、衆生しゆじやうの心霊しんれいいまだ開發かいはつせざる所に於おいて暫しばらく内外ないがい二面めんを觀み、能所のうじよを彼此ひしに隔へだつ、大円鏡智だいえんきやうちの光ひかりに自己じこの観念かんねんの窓まど開ひらく時ときに絶ぜつ対たい觀かんに歸きす。之これを大円鏡智だいえんきやうちと相応そうおうすと云いう。

鏡智光明裡の直觀

如來にょらいの光こう明みょうは自然物素しぜんぶつそにあらず。衆生しゆじやうの感覺かんかくにあらず。如來にょらい大円鏡智だいえんきやうちと衆生しゆじやうの直觀ちくくわん

観かんの致ち一てき的關係かんけいには、(一)時間空間じかんくうかんの規定きていを脱だつせり、(二)円通無碍えんつうむげなり。客観きやくかん界大円かいだいえん鏡智きやうちの現象げんしょうなれば、其その本質ほんしつは絶対観念ぜつたいかんねんにて是衆生これしゆじやうの信念しんねんが如来心光にやらいしんこうに接觸せつしよくする第一だいい歩ほなり。然しからばいかに如来にやらいを瞻仰せんじやうすることを得えんとならば、如来にやらいは肉眼にくがんをもて瞻おがみ梵ぼん音おんに肉耳にくじをもて聴きくべきに非あらず。即すなわち直観ちよつかんてき的に直覺ちよつたくすべきものなり。直観ちよつかんの對象たいしやうなる如来にやらいは無色無相むしきむさうにして而しかも一切さいの色身相好しきしんさうごうを現げんじ給たまえり。直観ちよつかん即すなわち心眼しんげんに拝おがむべき仏身ぶつしんは空間くうかんや時間じかんの爲ために約束やくそくせらるるものに非あらず。されば如来にやらいは何なにを彼ひとし此しとしまた遠近古今えんきんここんの範圍はんいを超こえて超然ちやうぜんたり。

如来にやらいの身相しんさうは無相無色むさうむしきなり。無色むしきの相さうは広大こうだい、一切処さいしよとして徧へんせざるなし。無声むせいの聲こえは大声たいせいなり。一切さいの時ときとして響ひびかざるなし。

真仏如来しんぶつにやらいは常然じやうねんとして今現いまげんに此ここに在まじまして説法せつぽうし給たまうの金言きんげん何ぞそれ疑うたがうべけんや。また導師どうしは仏ほとけを見みんと願がんずれば即すなわち心眼しんげんの前に現まえに現げんじ給たまうと。爾しからば如来にやらいはいかにして今現いまげんに在まじまして説法せつぽうし給たまうや。曰いわく汝なんじが与あたえられし三昧まいの宝鑰ほうやくによりて心眼しんげんの開ひらく処ところに

於て如来を見聞し奉らん。

如来は常に無声の声をもて我が為に説法し玉えり。我が信念は直覺的に之を聴けり、如来は我が為に宇宙の無尽を明し給う。また秘密藏を啓示し給う。如来は十方界処として極楽ならざるなく時として浄土にあらざるなき真理を示し給う。

鏡智光裡の吾人の直観は一切の規定を超えたるが故に、十方無數の仏土に對する観念観見に於いて、吾人は時間的に云わば過去無量劫の往昔も現在の当念に宛然たり。未來遠々劫の事も吾人が現観念に炳然たり。されば法華經に釈迦牟尼仏が過去久遠劫の大通智勝仏の時も猶今の如しと。また之を空間的に観念を廻らせば東方無量仏刹の彼方も我一念の心上に観見し南西北維もまた是の如し。

若し唯識によれば衆生アラヤ妄染に薰じて無明と成る。若し真如に薰ずる時は転依して四智を得。菩薩三祇劫滿位仏果に至る時、五八の二識を転じて鏡、成智を得ると唯識は樞大乘なるを以て斯く説くも、今は本より一切衆生の観念も亦写象も本覺鏡智

の一大観念を一切個々の心窓に影現するに過ぎず。然るに衆生の肉我の写象本如来一大観念の個体現なるを知らず。心霊開發せられて初めて之を意識す。吾人が写象及び観念本如来本覚の一大観念なり。楞嚴經に、仏陀が阿難の為に自己の心霊を開発して一大観念の本来一体なる理に悟入せしめんが為に仏陀が阿難に徴問し給うには、阿難よ、汝が前境の万物の物象を觀る。感覺の一大根底なるものは是誰ぞや。汝今庭前の樹林を見るに物色の光が彼より来て汝が視覺を刺して汝が見性を發すや。將た汝が見性の真心出でて彼物色の辺に到りて之を識別するとやせんと時に阿難謂えらく、

我等が感覺の根底たる心性は外界の物色が映じ来りて我が見性を刺撃す。故に我之を識ると。また或は主觀より客觀の方へ向つて往つて之を識るならん。または彼より物色が映じ来りて之を識別すと。阿難は物理的に器械的の五官の作用の上に於て判斷を下せるも、一切心理作用の根底に於ては未だ曾て明らめざるなり。最後に仏陀が阿

難^{なん}の爲^{ため}に自己^{じこ}心奥^{しんおう}の伏藏^{ふくぞう}を開示^{かいじ}せられし時^{とき}、尽^{じん}十方^{じゅうほう}の虚空^{こくう}より無辺^{むへん}の刹土^{せつど}乃至^{乃至}山河大^{さんがだい}地微塵^{ちみじん}に至^{いた}る迄^{まで}悉^{ことごと}く皆^{みな}一^{ひと}として自己^{じこ}一大觀念^{だいかんねん}裡^りの塵^{じん}たることを觀^{かん}ず。十方^{じゅうほう}の虚空^{こくう}汝^{なんじ}が心内^{しんない}に生^{しやう}ずること行雲^{こううん}の空^{そら}に点^{てん}ずるが如^{ごと}し。沉^いんや世界^{せかい}の空^{くう}に在^あるをや。豈^{あに}能^よく我^{わが}が本然^{ほんねん}の真心^{しんじん}を離^{はな}れんや。又^{また}云^いく、空^{そら}の大覺^{だいかく}中^{ちゆう}に生^{しやう}ずること海^{うみ}に一漚^{おう}の發^{はつ}するが如^{ごと}し。又^{また}曰^いく十方^{じゅうほう}虚空^{くうくう}微塵^{じんじん}国土^{こくど}、本我^{もとわが}一念^{ねん}心中^{しんちゆう}所現^{しよげん}の物^{もの}、昏迷^{こんめい}倒惑^{とうわく}して之^{これ}を自^{みづか}ら識^しらざるも苟^いも一念^{ねん}心を回^{めぐ}らせば、本然^{ほんねん}の一大觀念^{だいかんねん}中^{ちゆう}の万像^{ばんざう}なること瞭然^{りやうぜん}たり。

鏡智と近縁

如來心光^{にょらいしんこう}と衆生^{しゆじやう}の心念^{しんねん}と凡^{ぼん}と聖^{しやう}との心相^{しんそう}の懸隔^{けんかく}に於^{おい}ては啻^{ただ}にそれ十万億土^{まんぎくど}のみならんや。天懸^{てんけん}相隔^{あいへだた}るなり。而^{しか}も如來心^{にょらいしん}と衆生心^{しゆじやうしん}とに於^{おい}て空間^{くうかん}的^{てき}にも時間^{じかん}的^{てき}にも一毫^{いっごう}も相^{あい}隔^{へだ}つるなくて接近^{せつしん}をなす所以^{ゆゑん}のものは何^{なん}ぞや。是^{これ}如來心光^{にょらいしんこう}の本質^{ほんしつ}は觀念^{かんねん}態^{たい}にして自然^{しぜん}

物質ぶつしつの中に於おいて衆生しゆじやうの肉眼にくげんをもて相接あひせつすべきに非あらず、即ち感覺かんかくすべきものに非あらずして直觀ちよくかんすべきものなればなり。物質ぶつしつ即ち太陽たいようの光線こうせんと又人の器械きかい的なる肉眼にくげんとの關係かんけいによりて感覺かんかくする所は時間じかんと空間くうかんとの規定きていを免まぬるること能あたわず。若し如来にやらいの光明こうみようは物質ぶつしつ的にして吾人ごじんの肉眼にくげんをもて視みるものとすれば近縁こんねんは不可能ふかのうに属ぞくすべし。

視みよ、吾人ごじんが仰あおぐ処ところの太陽たいようは此この地球ちきゅうを距へだたること幾億万里いくおくまんり若し一時間じかん廿哩まいの速力そくりよくたる汽車きしやを以もつても尚なお五百年ごねんの時間じかんを要ようして初はじめて達たつす。然しかるに光線こうせんが此地球このちきゅうに達たつする速力そくは約りよく八分ふんの時間じかんを要ようすべしと。天文学者てんもんがくしやが望遠鏡ぼうえんきやうによりて認みとめ得うる処ところの最遠距離さいえんきよりの恒星こうせいは其光線ひかりきが凡おほそ千五百万年まんねんをもて始はじめて此の地球ちきゅうに達たつすべしと聞きく。斯かの遠距離えんきよりなる恒星こうせいの光は器械かいぎ的の肉眼にくげんに對たいしては度外どがいに付ふして之これを視みること能あたわず。

如来にやらいの身相しんさう光明こうみようは本もとより太陽たいようの如ごとく物質ぶつしつ的にあらず。若し物質ぶつしつ的の光明こうみようとせば先さきに千五百万年まんねんを要ようして始はじめて地球ちきゅうに光線こうせんが達たつすべき恒星こうせいに對たいする距離きよりよりは何万億なんまんおく倍ばいせる如来にやらいの身体しんたいなれば、吾人ごじんは如来にやらいの聖足せいそくの下したにありて瞻仰せんごうするに聖足せいそくの光明こうみようが

今日我が頭に達するも一億万年の後に膝の光に接し何億万年にして聖頭の無見頂相の光に遇うことを得べきや。然るに如来の大円鏡智の光明は本より已来本然にして法界に周徧せる心光にましますば、吾人が心靈の窓開く時は常然として昭々たり。我等が直觀的に觀念の窓開くときは如来は常にここに現在して説法し給う。

感覺の遠縁

如来鏡智の光明は一大觀念なれば衆生の直觀とは直接にして近接不可離の關係なることは已に明しぬ。近縁の反対なる遠縁は何ぞや。自然界に如来を求むる如きは遠縁なり。また主体の感覺即ち肉眼をもて自然界に光明を求むる如きは甚だ非なり。されば現代の如き文化の時機に際し天文学には望遠鏡を用い微細なるのには顕微鏡を以てす。然るに如何に天体を搜索するも未だ皆て極樂星を発見せず。また如何に顕

微鏡びきようの力ちからを藉かるも未いまだ仏陀ぶつだの光線こうせんという如ごときを実験じつけんせるを聞きかずと云いう如ごとき、幼稚ようちな思想しそうをもて高等こうとうなる宗教しゅうきようを非難ひなんする如ごときは蓋けだし愚ぐの甚はなはだしきものと云いうべし。仏教ぶつぎように所謂いわゆる如来にょらいの光明こうみょう及び浄土じょうどの存在そんざいは本来ほんらい器械いきをもて經驗けいけんすべき如ごとき物理ぶつり的存在そんざいに非あらざればなり。

尤もつも太陽たいようのエネルギーごとの如ごとき本もと如来にょらい法身ほふしんの一大だい勢力せいきりよくの実現じつげんたるは勿論もちろんなりと雖いえども、然しかれども衆生しゆじやうが信念しんねんの対象たいしやうたる処ところの光明こうみょう及び浄土じょうどの存在そんざいに至いたつては本もとより物質ぶつしつてき的存在そんざいに非あらざるを以もつて自然界しぜんかいに実験じつけんを求もとむべからず。

感覚かんかくを以もつて認識にんしきすべきものに非あらず。故ゆゑに高等こうとうなる宗教しゅうきようすなわち仏教ぶつぎよう所説しよせつの客体きやくたいたる仏陀ぶつだ及び浄土じょうどの実在じつざいは自然科学しぜんかがくの爲ために破壊はかいせらるべきに非あらず、また左右さゆうせらるるものに非あらず。寧ろ自然科学しぜんかがくの如ごときは仏教ぶつぎようの如来にょらい及び浄土じょうどの存在そんざいを心靈界しんれいかいに求もとむべきを反対はんたいの側がわに在あつて示しめすものとす。

睫まぶたを垂たれたる其その中なかが虚空こくう徧滿へんまんである。

直観的に拝む処の如来身相は广大と云わば先に説きたる千五百万年間を要して始めて地球に光線が達すべき遠距離よりは何万億倍せる彼方も如来の身体中にあれども如来の微妙なる色も声も自己の睫を垂れたる眼中に於て拝むことをうるに難からず。如来は本より感覚の対象となる物理的对象に非ずして直観的の心眼の対象にして虚空徧満なる身相に在ますが故に実に近縁である。いかに广大なるも物理的に空間の約束を被らず、光明の我に達するに時間的の制裁を受けない。

阿弥陀仏今現に在まして説法し給うと。実に然り。如来今現にこゝに在して説法し給えり。如来の聖身は実に广大無辺なり。吾人が肉眼を以て見るべき九蒼の容るべきに非ず。然るに吾一小室の内に在て実に之を瞻仰し奉れり。如来の梵音は実に深遠なり、十方世界に達せざるなし。然れば如来を直観し聖なる安慰の声を聴かんと欲せば肉我の眼や耳をもては逆も不可能なり。直観的に最も近き所の如来の色身と法音を肉の眼耳と肉我をもて見聞せんと欲するは甚だ誤りなり。

空間的くうかんてきにも時間じかんの上うへにも寸毫すんごうも離れぬ如来にょらいを發見はつけんすることの能あたわぬ所以ゆえんは何ぞや。
そは近縁こんねんの反對はんたいの遠縁おんねんによればなり。遠縁おんねんとは何ぞや。自己じこの信念しんねんなきによる。自分じぶん
の迷まよと心の闇くらによりて如来にょらいを遠ざけるによる。如来にょらいに遠ざかる原因げんいんの如来にょらいを憶念おくねんせざ
る原因げんいんは如来にょらいを信しんぜざるによる。如来にょらいを直觀ちつくかんてき的に拜おがむべき処ところの心眼しんげんは信心しんじんの開發かいはつす
る処ところにあり。信心しんじんの開發かいはつは一心しんに念仏ねんぶつするによる。故ゆえに一心しんに念仏ねんぶつして信心しんじん開發かいはつする
時ときに如来にょらい即目前いすなわちもくぜんに現げんじ給たまう。されば竜樹尊りゅうじゆせんじや者は信心しんじん華開はなひらきて仏ほとけを見みるとは讚さんじられ
たり。さればこそ經きように光明こうみようは徧あまねく十方じふぱうを照てらせども念仏ねんぶつの衆生しゆじようのみ光摂こうせつを被こうむるとは
説とき給たまえり。

機能致一の近縁

如来にょらいの心光しんこうと衆生しゆじようの信念しんねんとは機能きのうち致一しちいつの故ゆえに近縁こんねんなりと云いうは如何いかなる理りであると

ならば、如来の宇宙全一なる心と衆生の觀念とは内面に於て離るべからざる關係を以て居る。実は本一体であると云うことなり。亦換言せば能念の衆生の心と所念の如来の心光とは同一靈性の此と彼との両面より見たるに過ぎず。其故に衆生、仏を見んと欲せば仏目前に現じ給う。如来を拜みたる心と如来の相好と現れたる対象とは同じ心の機能である。例えば清霄に皎月を見るに、之を見る感覺と所感覺の空と月とは離すことは能わず。我感覺界の空と月なるか空と月とが我感覺と成り来るものか、何れにしても心機は一の両面なり。

能觀の心と所觀の仏心

我一心に靜座し冥想觀念に入りて直觀的に如来を觀する時如来は法界身に在して虚空に徧滿せり。また如来の心光は徧く十方法界に徧して残すことなし。此の深觀念

はに入りて如来の眞法身を觀ずる時所觀の如来身法界徧滿の故に従つて能觀の心もまた法界に周徧せり。また所觀の對象たる如来は無量壽にして永恒常然三世際に徹照するが故に能觀の心もまた三世際に徹照す。所觀の如来は神聖にして真理の光明なるが故に能觀の心もまた神聖にして真理の光明なり。所觀の如来は大智光明法界徧照の故に、能觀の心も大智光明法界徧照なり。如来恩寵一切処に徧滿するが故に能觀の心も恩寵一切処に徧滿す。

宗教意識の能所の接近なる關係は全く機能致一的にして如来光明を離れたる衆生の信念なし。衆生の信念を離れたる如来の光明なし。実に斯宗教的近縁の關係となる機能致一の形式は、例えば露の白玉が紅なす楓葉に置く時は同じく紅色を呈するが如く、また清霄月下の草露各々光彩を發す。月光の白露と離れざるが如し。又太陽の光と人の視力との關係に於けるも日光明なるも人の視力なき時豈に明を呈せん、人の視力も日光なき時は焉ぞよく視覚あらん。然るに一応之を分つ時は明は日光に

あり視覚は人の眼力にありと、然れども両方相互の交渉によつて初めて感覺なるものあるなり。宗教の機能致一の理もまた然り、如来の光明を離れたる衆生の信念なし。衆生の能觀を外にしたる所觀の光明なし。由之觀之、衆生の宗教心なるものは如来の光明を實現すべき器具なりと云うも然るべく、又如来の光明は衆生信念の所産なりとも云い得べけんか。衆生の信念なるものは全く如来の光明を實現すべき個々の機能なり。光明は唯一にして法界に周遍し之を實現すべき機能は無量無辺なり。衆生如来の光明を觀ぜんと欲せば自己の心靈即ち如来の心光と契合すべき処の信念に於て觀ずることを得べし。依つて尚お一層明に此如来心光と致一すべき衆生の心を説明せん。

吾人が精神の各機能の中に於て如何なる心理なるものが如来の心光と致一すべき機能なりやとならば、嚮に已に如来の光明は肉眼の感覺として見るべきものにあらざして直觀的即ち心眼にて接すべきものなりと説きたりき。

まず性智の心光と一致すべき自己の心機は最深の理想なり。まず自から寂靜たる
閑夜冥想観念して見よ、此心霊には天地万物悉く隠没し東西南北四維上下もなく唯
十方洞然たる一大靈性のみとならん。此一大靈性なるものは内に非ず外に非ず中間に
あらず我にあらず彼にあらず是即ち如来の大円鏡態なり。

此一大靈性即ち如来の光明智相なり。吾人が此の大自然を我がものと謂うなかれ、
実は彼我を離れたるものなり。此一大観念の中にある吾人の観念にして吾観念と一大
観念とは本来一体にして別なるものにあらず。例えば一大観念態は大虚空の如く虚空
には本内外なきものなれども、一の家を建つる時は家に内外あるが如く、如来一大
観念中の吾人の観念にして一大観念と吾人の観念とは大虚と家屋の内外との関係と異
らず。吾人が心は斯の一大観念に連絡する限りに於て精神の生活あるなり。若し此一
大観念との連絡を断ぜんか已に死したるなり。死とは心霊の窓已に閉じて此関連を絶
したるなり。由之観之吾人が直観の観念と如来の心光なる一大観念とは本来一体

なり。故に心眼に於て直観すべき如来の心光と吾人の観念とは機能致一と論ずる所
以なり。

如来の相好身も説法に於ても如来一大観念中の妙用として顕現するものなれば、同
じく機能致一の観念内に感ずべきものなり。

かく機能致一の関係より顕現する所の仏身及び仏音なりとすれば如何なるものも
外面より障碍すべきものにあらず。若し妄想せよ。此所に深心の信士あり、深く念仏
三昧に入りて仏身相好又は光明を観見すと。ここに天魔波旬甚だこれを憂怖し如何に
もしてこの交渉を妨たげんものと、或は金剛山及び鉄围山を以て信士の目前に移し
て之を妨害せんとするも不可能なり。何故と云えば人の観念と其対象なる観念界所現
の相好身とは本来機能致一なれば、外界より決して障害すべきものにあらずればなり。
吾人は之によって諸賢にすすむるに、しからば如何にして機能致一なる心が何に依
つて懸天して如来の光明に接し相好を観ずることを得るやとならば、如来と機能一

致すべき心霊を開発するにあり。念仏三昧を修して三昧相応し信念到る所に大観念の窓は開かれん。称名は此の関門を叩くの声なり。憶念は此宝蔵を開くの宝鑰なり。若し念仏三昧の鍵を用いずば、如来の一大観念界の門は開くべからず。此秘密の蔵を開くにあらざれば蓮華蔵界の法界宮に到ること能わざるべし。是を開くべき三昧の宝鑰は神秘的の近縁に説明せん。已に一大観念の門は開きて大円鏡中の自己心霊として如来の心光と自己の観念とは機能致一の真理は已に証明せるも、是より蓮華蔵界重々無尽の相を直接に観見せんと欲せば近縁の神秘の門を開くべし。

近縁の神秘

如来と衆生心との形式的見仏の關係に於て甚深不可思議の因縁あり。是を神秘的近縁と云う。是生仏相関の因縁は不可思議中の不可思議、神秘中の神秘なり。斯る不思議

議の因縁なるも念仏三昧を以て秘密の宝蔵を開き神が蓮華蔵界に自由に出入を得るものにあらざれば、此深義は解し難きやも測るべからず。されども諸賢よ、衆生と仏心との神秘の因縁は斯くまでも不可思議なることを知る時は念仏三昧によりて神秘の門を開き宇宙秘密の宝蔵より重々無尽の仏神力を見まく欲しさの動機となるならん。

神秘の第一関門

如來の境界に入りて神秘の蓮華蔵世界を見んと欲せば先ず汝が從來の肉眼即ち感覺なるものは現世界を如何に見得しやを知るべし。汝が肉眼は斯蒼天を見るに先ず南の方を望めば南の天は地に接せり東北また爾り、我感覺をもて天を瞻望すれば此の宇宙は寔に狹隘にして限りあるが如し。さればフェヒネルは人の感覺は環の内面に向るが如しと。実に然り大虚何ぞ吾人が肉眼を以て視るが如き狹迫なるものぞ。更に心を転

じて閉目冥想して直觀的に宇宙を觀する時は環の外面を見るが如く吾人の觀念は洞然として際限なし、絶対にして何の對するものなく宇宙を尽して一大觀念のみ大虚を通じて唯一體觀なり。ここに至つて自他の形相なく生仏の仮名を絶せり。吾人が曾て認識したる隘き世界は何処へか去りけん絶えて跡もなく唯絶対無限の一眞法界は雲はれて青天の如くに露出したり。この直觀の大地に踰られたり。ここぞ神の秘せし秘嚴淨土に入るべき序幕にして此一心靈界に入りて而して後始めて蓮華藏界の重々の秘密の門は開かるべし。絶対の一眞法界は時間空間の規定を離れたれば大小一異の名だもなし。焉んぞ遠近の差別あらん。本来自己の外に彼なし。一体に遠近を離れたるも如来の自己として最近縁なり。此一心法界の一切万物が千差万別微塵数の事々物々が相互に重々無尽の關係の中に一に一切を相入相即相入重々無尽の因縁あり。体に約せば相即の故に近縁なり。用に約せば相容の故に近縁なり。

体につき相即の關係により近縁

如来の光明にょらい こうみょうと一切衆生の心との關係かんけいにつきて光明こうみょうの本体ほんたいは宇宙うちゅう一体たいの精神せいしんにして一切衆生の個々の心念しんねんも其体そのたいは如来にょらいの一大心だいいしんに相即そうそくしたるものなれば、体たいに就つきて相即そうそく、即ち連絡れんらくして不可離ふかりの關係かんけいあり。宇宙森羅万象うちゅうしんらばんしやう一切微塵さいみじんの色心しきしんとして如来にょらい一大觀念だいかんねんを離はなれたるものあることなし。万物の色心しきしんは悉ことごとく一そうそくに相即そうそくするが故ゆゑに体たいに於おいて接近せつきんせざるものあることなし。一法界ほうかいちゆう中の塵々じんじんなれば一塵じんをあぐれば一切さいの塵じんを收おさむ、吾人ごじんが一念ねんの心こころ即ち如来にょらいの全体ぜんたいなれば、吾人ごじんが一念ねんの心こころに法界ほうかい一切衆生の心念さいしゅじやう しんねんを相そう即そくす。不可離ふかりの故ゆゑに近縁こんねんなり。これを余よみずか自ら觀かんぜんに、光明こうみょう遍照へんじやう十方世界じふぱうせかいと云いふ汝なんじが能念心のうねんしんも遍照へんじやう十方世界じふぱうせかいの一大觀念だいかんねんとなりしならん。若もし爾しからずば能念所念各別のうねんしよねんかくべつにして心口相応しんく そうおうせざるべし。汝なんじが所念しよねんの光明こうみょう遍照へんじやう法界全体ほうかいぜんたいなれば一切衆生の念仏衆生各さいしゅじやう ねんぶつしゅじやうかく

かくほうかいしゅうへん
々法界周徧、一切即一切、相即無碍なり。体に就ての相即の神秘的近縁の義を説き畢
んぬ。

用に約して相入の神秘的近縁

如來不可思議の妙用は神秘的に如來の虚空遍滿の身が十方世界一切の念仏衆生の心
中に相入して無碍なることを明す。

吾人は霽れたる清霄に九蒼を瞻望する時は、実に無數百千の星辰は天帝の因陀羅網
の宝珠とやらはかくやとばかりに燦然として光を放つを見る。奇なる哉其無數の星宿
は吾人の眼球の中心なる瞳子の中に渉入するも瞳子にも迫遷せず星宿も其相を変ぜず。
そは諸賢が常に經驗する所ならん。

吾人が靜かに慮をとめて念仏する時に、如來の無辺の相好身は無數百千の化仏虚空

遍満せるを吾人が一念の心眼中に感入するに、吾人が心は迫隘を感じず、また如来
 及び化仏は其身形を縮小せず。聖典に無量寿仏を見上るものは即ち十方無量の諸仏を
 見ると。諸賢よ念仏三昧の眼を開き見よ、十方無量の諸仏悉く衆生一心の裡に交感
 渉入するも尚余りあるを覚ゆべし。吾人一念心中を離れずして十方無量の諸仏を現前
 せり。是実に近縁の神秘なるにあらずや。ああ奇なる哉、此神秘的の近縁は已に二千
 数百年の往昔の教祖仏陀が降神母胎の朝より八相応化の夕なる鶴林涅槃の相まで或は
 宮中色味の酔醒めて健渉の白馬に御して出門の装いと、マガダの菩提樹下に於て一夜
 天魔の障を降し明星ほのかに出でし時豁然大悟の朝天地一新しガヤの園生は忽ちに
 変じて蓮華蔵と現れぬる相、また一代五十年間の教化の相は吾人が一念に往來して
 寸間も遠さを覚えず神秘的近縁何ぞかく不可思議なるぞ。心念の神秘は毫しも時間空
 間の為に約束を受けず。故に千万里も遠きにあらずして吾人の方寸にあり。数千年も
 甚だ近くして吾人の一念にあり。されば法華經に塵点劫の昔の大通智勝仏の當時は猶

し今の如しとは蓋しこの消息を洩されしならん。

猶神秘的の近縁なるものは、十方界一切諸仏及一切の衆生は一個人の一念心中に涉入して、一人に然るが如く一切衆生にもまた悉く渉入す。吾人が頭腦の一感元に十方一切世界及び所有の万物を容るるも遺すことなく、自己の腦を裏める膜が近にあらず太陽の遠きにあらず。神秘的の近縁自己本来の精神の本能なるの理を悟る時は真正の不可思議は自然の理法なることを知らん。念仏三昧眼開け如来不思議の真理は本来自性なる事を知る時は、十方法界一切の万象は自己一念心中を離れざるものなるを知らん。

感 応 の 近 縁

神秘的と云いまた感應と云い如来と衆生心との接近不可離の關係をなすには、これ

が形而上の理なかるべからず。

換言せば相互の不思議なる因縁の機能をなすに其根底に伏在せる理なくてはならぬ。それは実に然りこの原理なるものは即ち如來の光明という即ち不可思議なる如來の靈力の宇宙に遍在せることを信ぜざるべからず。実に宇宙万有の中に存在する處の一大靈力即ち如來の光明なり。斯一大靈力中の一切衆生心にてあれば一大靈力と衆生心とは本來根底に於て離れざることは吾人が大氣を離れて生活し能わざると同様なり。此靈力と本來一体にはあれども此衆生の信念なる心機の活動を起すにあらざれば感應なる不思議の妙用を發すことなし。譬えば人が拍手する時に声を發するは、空氣の圧迫による。若し空氣なからんか音声の原料なきなり。しからば拍手するも音響あることなきなり。さて音響となるべき原料なる空氣は元より空間に遍在するも人の両手の相拍つなからんか焉ぞ音響を發すべけん。それと同じく如來の一大光明の靈氣は本より宇宙に遍在するも衆生が一心の信念という拍手なき時はいかでか感應なるものあ

らん。如来の一大靈能と衆生の信念との感應力は一切の処に無數の化仏を現ず。或は不動の忿怒の相を現し或は地藏の形を現し、観音の三十三身、妙音の不思議身、一切の処一切の時に於て衆生が一心の信念する処に随つて応現す。經に無相法身は虚空同体なれば其住処なし。但だ衆生心想の中に住し給うと。俗輩が觀世音は普陀洛に在地蔵は伽羅陀山に住し給うものと信じまたは靈場靈社に神は在すものの如くに謂えり何ぞ然らん。本より如来の本體即ち一大靈光が法界に周遍するも衆生の信念を以て是を叩くにあらざれば感應の響は發せざるなり。皎月は本より清き空に照らすなるも念の水澄まざれば応現の影は感ぜざるなり。本より法界身の如来虚空同一の本體在さざる処なきも示現の相は感應の妙用による。かかる真理を信ずるにあらざれば不可離の如来に接すること能わず。凭塵の靈力を念ぜざれば心想住在の光明を見るに由なし、唯信ぜよ周徧法界の如来を。深く念ぜよ一大靈力の光明を。是の信念を外にして如来を求むるは不可能のことに属せん。

不可離ふかりの如來にょらいほど廣大こうだいなる仏ほとけはあらず。

我われを化度けどし我われに説法せつぽうし我われに教おしえ給たまう。

行住坐臥ぎょうじゅうざがに我われを離はなれず、時処じしよしえん所縁きどを嫌きらわすして我われに離はなれじ我われを捨すてじ。

我夜半われやはん寢ねさめる時ときにも我信念わがしんねんの前まえに如來にょらいは離はなれざりき。

近縁こんねんは不離ふりなり一致いちなり。

傳大士だだいじは曰いわく「夜々よなよな抱いだいてねむりあさなあさなまたともにおきごもくきよしをおなじくし
 仏眠ぶつねん、朝々あさあさ還共起き、語默ごもく同どう居止きど、起坐鎮相從きざとこしえにあいたがう

織毫せんごう不ふ相離はなれず、如ごと身影みのかげ一相ひとかげのごとく似に、欲ほ識し二ふた仏去処ぶつこころ、唯這語聲ただこのごしやうこれ是これ、」

妙觀察智と近縁

察智さつちは如來にょらいの心光しんこうと衆生しゆじやうの信念しんねんとの關係かんけいをなす処ところの智相ちさうなり。察智さつちとは一大心象中だいにしんしやうちゆう
 の衆生心しゆじやうしんと感應かんのおうし、之これによりて衆生しゆじやうに知見ちけんを与あたえ、また衆生相互しゆじやうさうごの關係かんけい、若もし哲學てつがくに

云わば宇宙と万物との関係、また万物相互の關係の心相なり。四智の中鏡智と性智とは總相にして作智は別相、感覺的の差別の上に現わるる心相なり。今の察智は前の總相と後の別相との兩方の關係に現わる。即ち人の心理智力に相當す。智力は自己に外界を判斷する理性と外部の刺激に反應する感性和兩性ありて智力をなす。衆生に此の智力とならしむる形而上の理性なり。察智の妙用によりて如來の心光と衆生の信念とは感應し而して人の仏智見を開き如來の妙境界を悟らしむ。而して衆生仏智見開く時は一切の時一切處に於て接近し常に啓示せられ悟入するを得。

即ち衆生が三昧の中に神秘の感應によりて秘密の寶藏を開き蓮華藏界に羅列せる重々無尽の莊嚴海を知見し唯知見するのみにあらず如來所有の真理は悉く自性所有なる事を知る。斯の不思議の寶藏を開かんと欲せば察智の真理を知らざるべからず、又換言せば生仏感應神人合一し衆生に啓示し衆生心を靈化するには如何なる形而上の理を有せるやを知るべし。察智とは宇宙心に万有關係上に生ずる智なりとす。

察智の総相

宇宙心は（鏡性の二智は）法界一体の総相にして後の作智の方面は色声香味触の感覺的心相なれば差別の相なり。此の兩方を調和し外部の刺戟に反応し又外界の事を判断し兩方を調和し外界の印象を我に容れ又我が外界の事物に渉るが如きの作用をなさしむ。

自然界と心靈界に通じて法爾としてこの妙相存せり。

相互に交渉相入の妙相不可思議

視よ天体に無数の星宿あり燦然として光を放つのみにあらず実に複雑極りなく、彼

と是、自と他、一と多、大と小、一切の色の万法が相互に交感渉入し無碍自在の作用が宇宙に常恒に行われつつあるに非ずや。

斯く神妙不思議の用相が行われつつある法界の実徳を意識する時は衆生と仏と相入し娑婆と浄土と相即し衆生と如来とは体と用と共に常に一切処に於て感應渉入すべき接近不離の真理は悟らるべし。

察智の總相を明すには宇宙間に所有る若は物的若は心的一切の象相は全一の理性に統べられ、三世一切の時間に出没生滅する一切の物と心との一切一々の不同なるものの如來察智の中に同時態にして前後始終等の別ある事なし、一切を具足し相渉入無碍にして而も相參雜せず。是如來察智の炳然顯現なり。

宇宙全一の心内の十方三世一切の色心依正生仏等の一切個々なれば一として全一心外なるなく、故に体に於いて相即し用に於いて渉入しこの關係実に複雑極りなきも整然たる秩序あり条理ありて行わるる造化の妙用神の一切知能はいかに微小なる事々物

物にも渉入無碍の關係が行われつつあり。全一の神の妙智なると共に一切塵個々にも感應交渉して万物を開発するの智用をなせり。神智内の塵々なれば皆悉く神智存せり。

用に約して一多相容の關係

全一心中の一切事々なれば物的にも心的にも各能容所入交感渉入の理存するが故に一塵に一切塵を容れ一念に一切心を相入し一切の物と心との相互の交渉自在なり。

例えば人ありて清宵天を瞻望する時に無数の星宿は悉く其の眼瞳の一感元質に相入して而も無碍。また吾人が世界雑多の事々を自己思考の源なる腦の一感質に相入し、吾人が眼に視る天体よりは幾万倍の天体を觀念するも我が頭の元質に容れて余なし。畜に人の心理に於いてのみ然るにあらず。物と物との關係に於いても又同じ。例えば又茲に一つの瑩々たる玉空中に懸る、その一珠の中に天体の星宿は悉く映現す

るにあらずや。独り玉のみにあらず縦令一微塵と雖も前の玉と同じく天体の星宿の影と容るる理に於て異ならんや。されば聖典に一微塵中現無量刹と。又曰く、一切仏刹微塵等、爾所仏坐一毛孔、皆有無量菩薩衆、各為說法普賢行。

不思議なる哉。全一理性中の一切色心なれば一個に多数を容れまた多数の中にまた一個を容る。譬ば一仏十方無量の衆生の信念に感応し悉く中に在りて現前す。一人ありて能く十方無量の諸仏を念ず。無量諸仏其信念の中に在ます。

体に約して相即無碍

全一の心を体とする一切の色心依正等の万物なれば、一切は其の表面には個々悉く皆格別の体面を現わせるも、其内面なる本体に於ては相即不可割の關係をなせり。例えば吾人が四支五体五官より乃至一毛一細胞に至るまで各自それぞれの自治体を為し

乍ら、而も身体に統一せられて相即不可離の關係をなす如し。円融法界無尽の縁起なれば一即一切、一切即一、円融無碍、一を挙げれば一切を収む。体の有性無性に依りて相即自在。相即とは自を廢して他に同ずれば拳体是彼。また一切の法も恒に他を摂して己に同ずれば彼の一切をして即ち是の己体たらしむ。一多相即し、混入して障礙なし。是相即の義なり。

カント曰く、人間百年間の生命は永恒存在の暫時現なり暫時現の生命は隱顯あるとも永恒の生命は消滅なしと。

吾人の一年は永恒の根底よりの現象なれば一念一切念と相即し無始無終同時態中の念々なれば一念無量劫と相即す。聖典に初発心菩薩即是仏。此縁起の妙理始終一齊、始を挙げれば即ち終を得、終を窮むれば方に始に原く。

宇宙心たる法仏如来には是の如く宇宙と万物との關係また万物が相互の關係をなしこれによりて万物開発し靈化の妙用をなす。此の妙用に現わるる心相を察智となす。

世に術者と被術者の相互の心力感伝に依りて被術者感覺を術者の意念の如くにしたる心力術あり世に催眠術と呼ぶ心力を感通せしむる理法外にあるにあらず。心力感應神降し、口よせ等すべて自然界に不思議力ありて人の心力に感伝感通作用をなさしむ敢て怪しむに足らず。

察智の自然界方面

宇宙心の心力作用とも云うべき察智は全一心と個々の心との關係また全心に統れたる個々の心なれば相互の感應作用の上に現わるる心相は察智の範圍たり。察智の用は全一に統れたる個々の心が相互の感應によりて世界万物は開發せられたるものなりとす。

有機的感応

察智さつちとは宇宙心うちゆうしんには相互そうごの感応上かんのうじょうの相そう、之これに依りて物ものを開発かいはつする妙用みようゆうなることを明あかす。之これを示しめさば自然律しぜんりつの中に植物しよくぶつにて例れいせば植物しよくぶつの生殖作用せいしよくさようは雌蕊しづいは雄蕊ゆうずいより發生はつせいし来る花粉かふんを受けて胚胎はいたいす、此時このときの両性りやうせいの交感こうかんは有機的ゆうき不識精神てきふしきせいしんの感応かんのうと云いわざるべからず。此この感応作用かんのうさようによりて植物世界しよくぶつせかいは開發かいはつせられたり。この例れいの如ごとく自然界しぜんかいにも心靈界しんれいかいにも開發的事業かいはつてきぎさうの行おこなわるるは此この作用さようによる。これ相即相入交感そうそくそうにゆうこうかんむげ無碍みようゆうの妙用みようゆうなり。

自然界を開発する妙用

吾人ごじんが目撃もくげきする処ところの自然界しぜんかいは天てんに日月星辰にちげつせいしんの依り繋かれるあり、地ちに一切無機有機界さいむきゆうきかいあり動植物どうしよくぶつの如ごときあり。この自然界しぜんかいを開発かいはつし生産せいさんし純熟じゆんじゆくするの妙用みようゆうは宇宙心うちゆうしんに如何いか

なる作用ありて而も之を能くするや。言を換えて云わば天地万物を造化するは神の權能なりとせば神は如何なる機用をもつて之を造化するやとの問なり。此の問題につきては衆説あり。或は自然道法大道元氣よく万物を生成すと、或は對極の一が陰陽の二氣を生じ陰陽二氣万物を生ずと、或は自然界を超えたる高等なる處に神在して神の意志によりて自然界万物を造化すと。斯教は汎神的一神論を立脚地となすが故に神の神智本一体中の万物なれば、一切有機無機を通じて神の内在精神を自己の根底とすれば根底に於て如來智に繋れる限りに於て、一切の個々たる動物も植物も同じく内性に於て神の性を具存せり。自然的に神の性を有する個体なれば、この個々の自己に自己を造化すべき性能を有す。然れども両性の感應によらざれば造化する能わず。爾らば即ちすべてこの有機物が相互の感應即ち雌雄両性の交感の如きは此れ自己の性を開發し分殖する妙用なり。故にたとい万物は神の造化というも超自然の神の意志によりて忽然として生物を造ると云にはあらず。万物内在の神が此の交感の作用によりて万物を

開発するものとす。

大にして天体を造り自然界を開発す。或る学者曰く、天体は本一大元素にして自ら陰陽兩動の力となりて此の兩動の感應力によりて天地万物は開かれたりと。神の全智全能は一切万有に内在し之によりて万物は造化せらる。

太陽の陽力と地球の陰力とはこの両性の交感の力は能く地球の万物よりすべての有機動物も植物も発生し生息する事を得せしむ。

然り而して太陽と地球との近縁の關係につきては太陽の引力地球の拒力とが常にその常規を逸せず因縁相係り感應同交して万物を造化せり。此の兩星は適度の接近によりて能く調和し能く万物を養えり。地球上の粹たる人の心靈も如來の心光との相互の感應相同じかるべし。

嚮に一切の植物にも雌雄兩氣の交感によりて植物の世界は開かれ之によりて相續せりとの例はすべての動物の分殖作用にも同じかるべし。動物に有機的内性自發的に雄

性の粹せいすいは雌性せいせいの受容じゅよう的てき能育のういくの両性りやうせいの交感こうかんによりて新あらたに動物どうぶつを發展はつてんす。

雌雄しゆう其性そのせいを異ことにす、其性そのせいを異ことにする処ところに随したがつて異性相愛いせいそうあいは還かえつて両性りやうせいを接近せつきんせしむる動機どうきとす。

人の性ひと せいの罪惡不淨ざいあくふじようなると神かみの神聖しんせいなるとの相反あいはんせる両性りやうせいは還かえつて生仏相愛しやうぶつそうあいの感応かんのうによりて近縁こんねんの因縁いんねんをなす。

人の学理ひと がくり的智識てきちしきを立りつする所以ゆえんのものも之これと同じく、本来人ほんらいひとには理性りせいと感性かんせいとの両性りやうせいあり、理性りせいは能動的のうどうてきにて自己じこの外界がいがいの事物じぶつに對たいして之これを判断はんだんし觀察かんさつするの性能せいのうを有ゆうし感性かんせいは受動的じゅどうてきにして外界事物がいがいじぶつの刺戟しげきを受けて感能かんのうを生しやうず。人の性ひと せいに此この両性りやうせいを具ぐするものは人の認識世界ひと にんしきせかいをなす所以ゆえんなり。人如何ひといかに健全けんぜんなる頭腦づのうを有ゆうするもすべての經驗けいけん即ち一切すなわ さいの見聞けんぶんを有ゆうせざらんか白紙はくしと同じくして認識にんしきは零れいなるべし。さればとて自性じせいに理性りせいなからんか一切さいの見聞けんぶんの經驗けいけんも之これを判断はんだん觀察かんさつの能のうなくしていかでか認識にんしきすべけん。人ひとに此この理感二性りかん せいゆう有ゆうするは寔まことに万物相互ばんぶつそうごの關係かんけい即ち両性りやうせいの感応かんのうによりて人ひとの心しん

性を円満に發達せしめん為の内的神性なり。又人心の理感二性を具するは人を真善美に到らしむる手段として賦せられたりと云うも不当ならんや。

人心の此二性は万物の相互の接近を可能にする能力なり。能動の理性は我を広げて世界に及ぼし、感性は万物を容れて我物となす。

見よ我理性は肉眼の及ばざる天体の彼岸までも我ものをして観念し得るにあらずや、また我感性は大王の冠の玉の如くに麗しき天津み空の星を我に容れて感ずるにあらずや。この両性の關係なからんか一切の人の智識なるもの有るなからん。また如何に微々たる生物にしても万物内在の神の性体を離れたる一物もなしとすれば一切の生物は各其の天則、理法に則りて皆小造化の妙用存せり。其小造化の用をなす所以は相互の關係即ち感應によりてなり。人は小造化たる性能を有すると共に察智の分たる神智の性能を有す。

宇宙内心、自然万物内在の神性は一切智によりて万物に秩序を整来し一切能により

て万物を活動せしめ、一切智と能との相即相入交參無碍の妙智によりて天地万物を開
発し、自然万物内在のは個々が相互の感応の妙智によりて自然界は常恒に開發的の妙
用をなせり。

自然界中啓示

万物内在の神の妙智は自然界の一切を個々の感応によりて造化するのみにあらず。
また万物の内に在りて常に光を放ちて人に真理を啓示す。即ち雲漢星宿を支配する理
法、または椅子の落つる処に地球の引力あるをニウトンに示せし。蒸氣力の理をワッ
トに知見せしめ、すべて自然万物中に神は内在し常に人に啓示し自然の理法自然に含
有せる能力を悟らしむ。また或人は曰く、星宿中に光を放ちて在せる神、また余の願
う処の神を外界到る処に於て発見すると同じく自己の内面にも神を見ると。

神の在す処に啓示の妙智存せざるなく妙智の存する処に向つて深く観察を用うる処に神秘の門は開かれん。例えば万物内在の啓示あるも自己内面の察智を開くにあらざれば如何でか啓示の光榮を得ん。

自然界に万物に潜める事物の原理を精密に研究し世に紹介する自然科学の如きは、自然界に潜伏せる理法即ち神意を人類に啓示するものと云うべし。

自然現象の原理たる万物形而上の理法を自己に与えられたる察智の鑰をもて神の内意を探りて世に紹介し、宇宙の本体及び宇宙万物を構成するの理を研究するに理体の方面より開く演繹法と事実の上より察する帰納法の鑰を以てす。此等は万有中に存する妙智と自己内在の智との相応する処に開けん。

如来察智の光は遠きにあらず万物の中にありて最も近し。之に近き之に接する事能わざるものは自己の潜める察智の未だ開発せざればなり。

近し万物中に存する察智光。

心靈界の啓示

察智は神の妙智にして万物相互の感応の中に自然界の無機有機を通じて開発したりとは已に論じぬ。万物を開発し生産しまた向上し潜伏せる性を開発するが如きも悉く斯智の妙用なることは已に論じぬ。

生物生命を向上せしむるは生物自身に有せる向上すべき性能とまた一方には之を資くべき縁即ち感応の作用によりて自然の有せる精神と已に發展せり。進んで終局目的なる心靈界に向つて如來地に達すべきには吾人が心靈は如來の心光と如何なる關係を以てて目的を達することを得ん。嚮に述べし自然界の有機物は植物の花、動物の春期異性相愛親和の感応交渉によりて子と云う如きものを開展せると同じく、終局目的なる心靈界に摂取せんには神人の交感即ち生仏の感応によりて人の心靈を開発し靈性を

成ず。摂取の光明と念仏衆生の不捨の感応ここにあり。

人の原因の性と助縁の助成によりて人の第二の天性を種々に変易す。自然界の資縁となるものと概して歴縁対境、概して三悪六道の業のみを増長す。

生仏感応

宗教の宗たる所以のものは人の信念と神即ち如来の心光との一致する所にあり。即ち生仏感応の作用によりて人の知見を開きて如来の聖靈態に同化する処にあり。

法華には如来一大事の因縁を以てこの故に世に出現し給う。一大事因縁とは衆生をして仏智見を開示して仏の正道に悟入せしめんが為に世に出現すと。因縁とは衆生の信念を因とし如来の心光を縁とし因縁感応して衆生の仏智見を開示す。

密教には如来の四曼と三密とは法界一切処に周徧し法仏の三密は甚深秘密一々尊等

しく刹塵の三密を具して互に相加入し彼と此と摂持して衆生の三密と相應すと。

また三密の金剛を増上縁として能く大日三身の果位を証す。加持とは如来の大悲と衆生の信念とを表す。仏日の影衆生の心水に影現するを加と曰う。行者の心水能く仏日を感じるを持と曰う。行者若し能く此の理趣を観念すれば三密相應するが故に乃ち本有の三身を証得すと。

また如来刹塵の三密は円融無碍にしてまた衆生と仏とに於て重々無尽交渉は恰かも鏡中の影像と燈光とが渉入するが如し。彼身即是此身、此身即是彼身、仏身即衆生身衆生身即是仏身、不同にして同、不異にして異、三等して無我なり。

華嚴には衆生の信念と如来の心光とは体に於ては相即し用に於て相入し相互に交渉し感應無碍自在なり。

総じて云わば如来に所有る物心一切の相は全一の理性の統べられ、三世一切時間に出没せる万物、空間一切処に現わるる色心、一々不同なるものは、絶対同時態にして

前後始終等の別あることなし。一切を具足して而も相參雜せず。

相入の関係

吾人の心は如来心の個体现なれば此の感性の一塵に一切の塵を容れ、一念に一切劫を相入し、一切の物と心との相互の交渉は自在なり。衆生の心は本無力即ち白紙の如きものなれば此の心中に万徳円満の仏身心光を感じる時はこの感應によりて終に神聖なる慈悲なる聖心に感應して衆生心が聖心に靈化する。

如来の聖徳は無辺に在ませば此に感化する徳も無辺なり。如来心中の吾人の心なれば心用は不可思議にして吾人の心念の中に神秘的に感應して聖靈即ち吾人の心中に在ませり。

如来の分身現たる無量の聖象も吾人の心中に感應して在せり。一心に仏を念ずる時

我心空にして唯如來のみ在せり。

衆生心と仏心との感性的近縁感応の妙なること例えば空間的に幾億万里なるか測るべからざる距離に在る星宿は燦然として吾人の眼球に渉入し然る時瞳中只彩光燦然たる光のみありて存せり。此と同じく吾人一心に万徳円満の如來を念ずる時吾人の信念は本空にして唯万徳円満の聖徳のみありて吾人の感性を支配せり。心は仏心と接近し毫末の距離あるを覚えす。

極楽は十万億土遙なりと雖も吾人の信念に在って毫末も距れず。生仏相入交感の妙用心と心と感応接近なり。此に感応と応化の徳あり。能く衆生心を接近して仏心に靈化す。活動即ち用につきては相入して衆生心の無力を仏心に靈化するなり。

体に約して相即（衆生心を廢して仏心に立つ）

如来心性にやらいしんしやうを体たいとする宇宙うちゆう一切さいの色心しきしん万法まんぽうなれば一切さいの万物ばんぶつは外観がいかんに於てこそ千差せんさ万別ばんべつの体たいを現げんずれども其その内面根底ないめんこんていに於ては本一体もと たいの如性によしやうなり。一真如体しんにやたいちゆう中の万物ばんぶつなれば其本体そのほんたいに於て相即不可離そうそくふかりの關係かんけいを持じせり。円融法界無尽えんゆうほうかいむじんの縁起えんぎ、一即一切そく さい、一切さい即一そく 一、円融無碍えんゆうむげ、一一を挙げあぐれば一切さいを収おさむ。体たいに有性無性の義ぎあるによりて相即自在そうそくじざい相即そく 一、自じを廢はいして佗たに同どうずれば挙体是彼こたいこれかれ、生仏本一体相即しょうぶつもと たいそうそく しんたいの心体しんたいなれば肉我にくがの汚よごれたる我われを廢はいして神聖しんせいなる如来にやらいの方面ほうめんを取るときには精神せいしん挙体こたいは如来心にやらいしんとなる。貪瞋五欲とんじん ぐく ごとじんの吾人ごじんの心も心の本体ほんたいは唯一ゆいなる如来心にやらいしんを根底こんていとす故に相即そうそくして一体たいなれば斯かる心こころを廢はいして清淨しょうじやうなる如来心にやらいしんに立つ。吾人肉我ごじんにくがの為ために迷没めいもつする時ときには全体迷ぜんたいまいとなる。

互映無碍の故に近縁なり

衆生しゆじようしん心しんと如来心にょらいしん光こうと感應交参かんのうこうさんの理りにつきては万物の体用たいゆうは相即相入そうそくそうにゆう、互映無尽ごようむじん、一微塵中みじんちゆう、各無量諸仏かくむりようしよぶつ、於中説法なかにおいてせつぽう。又云く、如一微塵所示現いちみじんじげんするところのごとく、一切微塵亦如是、広こう大無辺だいむへんの仏刹海ぶつせつかいも一微塵中みじんちゆうに入り乃至法界なにしほうかいを塵内に顕あらわし、宝刹ほうせつを毛端もうたんに現げんず。

吾人ごじんが脳裡のうりの一感元中かんげんちゆうに無量の星宿せいしゆくを納おさむるも又碍またさまたげなし。如是かくのごとく相入無碍そうにゆうむげの故ゆえに一塵じんの中うちも広大無辺こうだいむへんの仏刹ぶつせつなれば不思議ふしぎの妙智みょうちの用已ようすでに時間じかんにも空間くうかんにも遠近えんきんを離はなれて無碍自在むげじざいなり。

觀察感応の故に近縁

念仏摂取の如来智慧光明

一心念仏して如来の光明に摂取せられたる時吾人の心体挙体現前し玲瓏分明なり。
如来の心体は絶対無限永恒本然なれば吾人は相即の己を無にし如来心を有する時即ち吾無量寿体なり。

生仏の心体に約する時は一体に相即し本来如来心中の吾人の心なれば一致的近縁、形式に於て距離ある事なし。未だ心体を体得せずして肉の個体我の立脚地にあるものには相即の近縁は得て証すべからず。衆生心中相即の如来心体なれば自己の本体なる絶対の方面を開発し相即の自己を無くし如来性のみをとるときが即ち摂取せられたるなり。

体に就ては本体相即の故に近縁と、また己を無にして相即の如来性に帰するが故に性に於て近縁なりとす。

互映無碍の故に近縁なり

衆生心しゅじょうしんと如来心にょらいしん光こうと感応交参かんのこうさんの理りにつきては万物ばんぶつの体用たいゆうは相即相入そうそくそうにゅう、互映無尽ごようむじん、一微塵中みじんちゆう、各無量諸仏かくむりょうしよぶつ、於中説法なかにおいてせつぽう。又云またいく、如一微塵所いちみじんじげん示現しげん、一切微塵亦如是さいみじんまたかくのごとし、广大無辺くわんだいむへんの仏刹海ぶつせつかいも一微塵中みじんちゆうに入り乃至法界なにしほうかいを塵内じんないに顕あらわし、宝刹ほうせつを毛端もうたんに現げんず。

吾人ごじんが脳裡のうりの一感元中かんげんちゆうに無量の星宿せいしゆくを納おさむるも又碍またさまたげなし。如是かくのごとく相入そうにゅう無碍むげの故ゆえに一塵じんの中うちも广大無辺くわんだいむへんの仏刹ぶつせつなれば不思議ふしぎの妙智みょうちの用已ようすでに時間じかんにも空間くうかんにも遠近えんきんを離はなれて無碍自在むげじざいなり。

觀察感応の故に近縁

觀察の三種の相

法ほう仏ぶつ如にょ來らい察さつ智ちの妙みょう用ようとして相そう即そく相そう入にゅう重じゅう々じゅう無む尽じんに互ご映ようするの真しんは已すでに明あかしぬ。次つぎに生しょう仏ぶつ感かん應おうによりて仏ぶつ智ち見けんを開ひらきて如にょ來らいの境きやう界がいを衆しゆ生じやうに啓けい示じし玉たまう、その啓けい示じの表ひやう相そうは如何いかん。

仏ぶつ教きやう中ちゆうに示しめす処ところの觀かん仏ぶつ三さん昧まいの妙みょう相そう甚しん深しん広かう大だいなり。然しかれ共ども先まづ三しゆ種そうの相あかを明むして無む尽じんを撰せんすべし。

如にょ來らいの妙みょう相そう三さん種しゆとは一いっ、感かん覺かく的てき、二に、写しや象しやう的てき、三さん、理り想そう的てき之これなり。一いっに感かん覺かく的てき啓けい示じとは衆しゆ生じやう見けん仏ぶつ三さん昧まいに入いって心しん眼げん開かい發はつし仏ぶつ境きやう界がいを現げん前ぜんする時とき先せん驅くとして感かん見けんすべきものは感かん覺かく的てき啓けい示じなり。三さん昧まいの中うちに或あるは明みやう相そうに接せつするあり。明みやう相そうとは心しん眼げんの前まえに或あるは方ほう寸すんの光こう相そう光こう曜よう晃かう々かうとして徹てつ照しやうするあり、或あるはまた微み妙みやうなる花はなを見みるあり、または瑠る璃り宝ほう地じ等とうを觀かんずる等とうあり。乃ない至し益ます々ます進しん行かうし發はつ達たつして本ほん經きやうに示しめし給たまいし如ごとき宝ほう地じ宝ほう樹じゆ宝ほう

池宝楼閣等乃至無尽の莊嚴顯現す。其妙象言を以て明すべけんや。

衆宝莊嚴の清浄国土の相または微妙端嚴なる仏陀の相好光明等の心眼に見るべき聞くべき如きは感覺的なり。感覺的というも肉眼の対象なる物質的的感覺的現象なりと謂うべからず。

次に写象的啓示とは初めに如来を相好光明等を以て観ずるもそれは如来の本体にあらず。不可思議の靈能より顯現したる相なりとし如来は神聖正義慈悲智慧等の最靈徳として如来を觀見す。

如来の智慧は四智の徳法界に周徧し一切衆生に智見を与うる等、慈悲は如来の恩寵である。

如来の恩寵の觀念には罪の爲に亡びたる我等を救ひ知見を与えて已に亡びたる靈を回復し聖き人となし給う。我等がすべての苦と悩とは己が心の迷より起る。然るに如来に知見の眼を与えられて心情も平和と歡喜とに充さるるに至る如き。また如来は神

聖なる光と觀ぜらる。即ち吾人が胸中に聴ゆる神の聲は神聖にして無上の權威ありて
即ち真理の源にて在ます。神の照鑑の前には自律的に道德の行爲となるを得。また
神は正義の力を与えて吾人に真理の光の中に正しく公平に私なく不正なる事には良
心の呵責を感じ公正なる事には大なる力を与えられ私を捨て公平を取り六度八正等
の聖き道に進み向上の進路を示し給う。これ正義の啓示なり。

神の啓示は吾人に正しき知見を与え神と共にありて神の指導の下に働くべき道を照
すにあり。神は唯智慧と慈悲との光として宇宙に充滿し給えるを示さる。

次に理想的啓示とは如来法身を觀するなり。法身は如来の本体にまします。法身
は真如の体、形色を超え相貌を絶し智慧慈悲等にもあらず。唯宇宙唯一の理想態正し
く一切の妄想分別を離れたる最深の理想と相應する處即ち絶対同時の觀念態なるが
如くすべての色相を離れたる、所謂唯証のみありて相應する處の相なり。

三種の啓示の表相は即ち如来の体と用とを觀じたり。法身觀は如来の実体を觀じ、

如来にやらいは大智慧だいちえ光明こうみょうの義ぎ、徧照へんじょう法界ほうかいの義ぎ、真実識知しんじつしきちの義ぎとして、法界ほうかいに徧徧しゅうへんせる智慧ちえ如来にやらいの心相しんそうなり。次に相好光そうこうこう明みょう依正二報えせいふほうの莊嚴等しょうごんどうは如来にやらいの靈能れいのうより示現じげんしたまう相そうなり。故ゆえに用相ようそうとす。

近

縁

本法界身もとはうかいしんの如来にやらいは如来にやらいの実体法身じつたいほつしんと智慧慈悲神聖等ちえじひしんせいとうの如来心にやらいしんは一切処さいしよに徧照へんじょうす。不可思議かしのぎの妙用みょうゆうもまた如何いかなる処ところにも徧へんせざる処ところなし。但衆生心ただしゅじょうしんが無明むみょうに覆おおわれて之これを知見ちけんするによしなし。若し三昧まいの宝鑰ほうやくをもて自己じこの心靈しんれいを開ひらく時は一切処さいしよにて一切さいの時ときに於おいて知見ちけんすることを得うべし。

如来本にやらいもとより遙はるかなるに非あらず心眼開しんげんひらく時ときは当处即現とうしよそくげん、浄土甚じようどはなはだ近ちかきにあり三昧花開まいはなひらく時とき自己じこの心中しんちゆうに在ありて見みらるべし。

釈迦牟尼仏菩提樹下に在て華嚴三昧の蓮華藏世界の花は嚴かに飾りて法界に充滿し
遮那圓滿の法身は無辺塵沙の相好を以て莊嚴し、華嚴世界の所有の塵一々の塵に悉
く蓮華藏世界を摂し、一々の塵の爾るが如く一切塵もまたまた然り、此の相互映現は
如法界自然の察智の妙用なり。

察智の妙用とは如来一大智光の衆生心なれば内觀の一体と個々が相互に映現するこ
とは鏡中に燈火光のある如く、水江に澄む時は天上の月を宿す、水月感應遠を覚え
ず月水中に在り近縁ならずや。

吾人心常の如来にあり己を捨て如来に在り念々恒に淨土に遊ぶ。交感の妙用を識
る時は誰か近縁を否定せん。

唯絶対無限光寿、即ち弥陀の聖名を崇び、聖意を仰ぎ、それに帰せんが為めに意に弥陀の身を憶念し、口に弥陀を称え、身に弥陀の行動を實現す。一念弥陀なれば一念の仏。念々弥陀なれば念々の仏。仏を念ずる外に仏に成る道なし。三世諸仏は念弥陀三昧によって正覺を成ずと南無。